

四旬節第4主日の説教

マルセリーノ 神父 2009年3月22日(日)

《"赦し"は神様からの"癒やし"の恵》

マリセリーノ神父様の黙想会より

この黙想会について特別にテーマは与えられませんでした。自分なりに"赦し"について話をすればよいのではないかと思いました。私達にとって神様からの"赦し"は、神様からいただいた命を生きる為に、とても大切な恵みであり、欠かせないものです。そして、四旬節の典礼の中でも回心するように呼びかけられています。赦しの恵みがなければ、私たちに、本当の回心は出来ないと思います。その様な意味でこれからの話を聞いて下さい。

最初にその準備として、また祈りとして、マタイの福音書から1つの箇所を読ませて頂きます。

「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるのか。徴税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるのか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」(マタイ 5.43-48)

"赦し"という言葉は、"罰"と関連しているように思われています。ですから、赦してもらえば罰を避けることが出来るように受けとめられがちです。しかし、神様からの赦しに対しては、罰と関連付けるとあまりよく理解できないと思います。まず、神様は"罰"を与えない方です。そういう意味では、私達には神様からの赦しは必要ないのです。聖書の中には、「神様は悪い人には罰を与えて、良い人には報いをなさる方だ」と書かれていますが、これは1つの表現であり、イエス様が教えて下さった考えとは全然違います。

先程読んだ聖書の箇所にもあるように、神様は「全ての人に平等に太陽を昇らせ、雨を降らせる」方です。どの様な人にも差別をなさらず、同じように愛して下さい、恵みを与えて下さいます。神様は悪い人にも恵みを与えて下さる方ですが、罰を与える方ではありません。もちろん、悪い事をして罰が下る、ということも時にはあるでしょう。しかし、罰を与えるのは自分自身なのです。悪い事をすれば、その結果を自分自身で受けとめなければならないからです。もちろん神様は、私達が悪い事をしないように望んでおられます。しかし、悪いことをしたからといって、罰を与えたりはしません。むしろその罰があたらないように、いつも働きかけて下さるのです。それが、神様の赦しであり、恵みであり、愛なのです。

神様の赦しは、罰ではなく、命を癒すものなのです。それが無ければ、私達は本当に恥じる事も出来ないし、神様からいただいた命の豊かさも味わう事が出来ないと思います。

皆様は、毎日のように、車を運転していますね。交通ルールに違反すれば罰が与えられますね。ルールがあるのは、自分の命も含めて人の命を守る為です。ルールを考える前に一人一人の命がどれほど大事なものののかを考え、理解しなければ、交通ルールの意味も分からないのではないかと思います。

私達は、神様から罪を赦して頂く必要があります。でもそれは、交通ルール違反のような意味で許してもらおうということではありません。命を傷つけてしまうと、私達はそれを癒す力を持っていません。

もしお皿を一枚傷つけてしまったとしたら、それを新(さら)の皿にする事はできますか。いくら直しても新の皿にはなりませんね。新の皿に出来るのはこれを造った人、造る事が出来る人だけです。人間の命も同じです。人間には人間の命を造る力はありません。命を傷付けてしまったら、それに対して人間は無力です。命を癒やし、それを新たにできるのは神様だけです。だから人間には、神様の赦しが必要なのです。神様の"赦し"とは、"癒し"の恵みなのです。

聖書の中にもそのことは、はっきりと示されています。例えばマルコの福音書には、最初の奇跡として、ライ病人が癒される事が書かれています。その時代、ライ病は人間の力では治せない病と思われていました。それをイエス様が治して最初の奇跡を行ったのです。二番目の奇跡は中風の人が癒されるという奇跡でした。イエス様は、その奇跡を行われる前に、運ばれてきた人に『あなたの罪が赦された』とおっしゃいました。その場面では、イエス様の周りに沢山の人がいて、その病人をイエス様の前まで運ぶ事が出来ず、建物の屋根に登って穴を開け、その穴から降ろしたのでしたね。現代の家では無理かもしれませんが、その時代の家では出来たのですね。しかしその人は、そこまで苦労して降ろされたのに、イエス様から、"病氣"ではなく「あなたの"罪"」が赦された、と言われたのです。それを聞いてがっかりしたのではないかと思います。その人は、本当は病氣を治してもらう事を望んでいたでしょう。そして周りの人はイエス様の言葉を聞いて、「それは冒涇だ」と思ったのです。罪を赦す事が出来るのは神様だけだと思っていたからです。しかしイエス様は、罪を赦す力が与えられている証拠として、その人を治して下さいました。

福音書の中ではっきり示されているのは、イエス様が奇跡を行って人々の病氣を治して下さったことです。しかしイエス様は医者ではありませんでした。ただ病氣を治す為にこのような奇跡をなさったわけではありません。イエス様が目指していたのは、人間にとってもっと大事な癒し、大事な救いです。救いというのは、罪が赦される事によって与えられる癒しである、ということを示したのです。だから、福音に"神様の赦しは癒しの恵み"だとはっきり述べられているのです。そして、癒しの恵みは私達にとって必要な恵みですが、神様しか与える事の出来ない恵みでもあります。イエス様は、神様の子としてその力を持っている事を示して下さいただけではなく、自分の弟子達にも罪を赦す権力を与えて下さったのです。でも根本的には、それは神様の力であり、神様の癒しです。神様の力がなければ、私達の命が癒される事にはならないのです。

この様に考えれば、私達にとって神様の赦しがどれ程必要なのか理解出来るのではないのでしょうか。神様の赦しが無ければ、私達は回心出来ないのです。回心とは、命が新たにされる事です。イエス様は、回心を説明する為に、"木とその実"の例えを使いました。木になる実は、実だけ変えようとしても無理です。木が変わらなければ実は変わりません。イエス様が言いたかったのは、"実"とは"人間の行い"で、行いを変える為には"木"すなわち"人間の心・命"が新たにされないとならない"実"を結ぶ事も出来ないという事です。

私達は、自分が行っている事や人との係わりがうまくいかないと、表面的にこれらを変えようとしてしまいます。しかし、本当に変えるためには内面から変わらなければ、行いも係わりも変わらないでしょう。変わるということは癒されるという事です。心が癒される事によって私達の生き方も変わって行く事になります。

そういう観点からも、私達が回心する為には神様の赦しが必要なのです。

別の面から考えてみます。私は日本に来てから36年になりますが、まだまだ"日本人になった"とは言えないようです。スペインより日本にいる方が永いのですが、まだ中途半端です。日本に永く暮らしてみて、「日本は"なかなか赦さない社会"ではないか」と時々思います。日本では大きな過ちを犯したら、いつまでも自分の"履歴書"に残ってしまうのです。そこから立ち上がるのはなかなか容易ではありません。昔は自分の犯した過ちの責任を取る為に"切腹"をしなければなりません。今はその様な事はありますが、一度信頼を失ってしまうと、それを取り戻すのは難しいです。だから新しいチャンスがなかなか与えられません。その様な事から、日本は"赦さない社会"になっ

ています。だから、日本人にとって赦しの体験をするのは難しいと思います。キリスト信者になっても、"本当に赦されている"ことを実感しながら生きるのは、難しいと思います。

イエス様の福音・メッセージは、よく"愛のメッセージ"とされています。そして、イエス様は神様の愛も知らせて下さいましたが、互いに愛し合わなければならないという基本的な掟も与えて下さいました。しかし、イエス様の福音・メッセージは、愛のメッセージだけではないのです。"赦しのメッセージ"でもあります。その赦しを本当に理解できなければ、イエス様の教えも理解出来ないのではないかと思います。イエス様は、たくさん"赦した"からたくさん"愛した"ことになる、とおっしゃっています。本当に赦し合う事が出来なければ、本当に愛し合うことも出来ない、とおっしゃっているのだと思います。赦しの1つの大事な意味は、どんな事があっても"新しい出発"のチャンスを与えられると言うことです。

罪の現場で捉えられた女が、モーゼの法律により、石殺しによって殺される事になっていました。イエス様を試す為にその女をイエス様の前に連れて行き、「この女を石殺しにする事をどう思いますか」と問いました。それは、イエス様がどの様に答えても逃げられない罠でした。しかしイエス様はその時『罪の無い人が石を投げてよい』と答え、誰も石を投げる事が出来ないまま去って行ったのでした。そしてイエス様は、その女の人と2人になった時に『誰もあなたを罪に定めませんでした。私も定めません。行きなさい。もう罪を犯さないように。』とおっしゃいました。こういう言葉で本当の神様の赦しを教えたのではないかと思います。神様は私達を決して罪に定めません。"罪を犯したからそれで終わりだ。救いがない。"ということは決してありません。私達が立ち上がるチャンスをいつも与えて下さるのです。私達を変えて励まして下さるのです。その女の人にとって、イエス様の言葉には大きな力がありました。神様の言葉は、私達にとって立ち上がる力を与えてくれる恵みなのです。

この2つの事から神様の赦しを考えると、どれほど神様の赦しが私達にとって必要な恵みなのか、よく理解できるのではないのでしょうか。神様の赦しについても、最初に読んだマタイの福音が当てはまると思います。神様は悪い人の上にも、正しい人の上にも太陽を昇らせ、雨を降させます。無条件に皆を愛して下さいます。愛と同じように、差別なせずに誰でも赦しても下さるのです。神様の赦しを必要としない人は誰もいません。そして神様が私達を招いて下さるのは、正しい人だけではなく、罪人だから、です。ただし、イエス様は、赦しを頂く為に1つの条件をはっきり示されました。その条件が無ければ、神様が赦して下さいても、私達にはその赦しを頂く事が出来ない、とおっしゃったのです。その条件とは、「主の祈り」の中にありますが、『他の人を赦しなさい』です。神様の赦しを頂く為には"赦す心"が必要です。謝る勇気よりも他の人を赦す心が、神様の赦しを頂く為に一番大切に欠かせない条件なのです。

ある人にとっては謝る事は難しいでしょう。しかし、謝る事よりも赦す方が更に難しいと思います。そして、赦せないと思ったら、なかなか謝れないでしょう。

私の個人的な考えですが、日本は"戦争のこと"をなかなか謝れない国だと思います。もちろん心から謝っている人も多いのですが、政府としてはなかなか謝る事が出来ません。先程も言ったように日本の社会は"赦さない社会"です。"赦されている"体験が無いから、謝っても救いにならないのです。救いがないから救われない、そして謝ることも出来なくなります。赦せないから、赦されない。赦されている体験がないから、赦すことも難しいのです。

でもそれだけではなく、赦せない気持ちは、誰にでもあります。特に、自分の心の中に"痛み"があると赦せない気持ちになります。赦せない心は"閉じてしまう心"です。けんかをした時、お互いに傷付けあってしまったらどうなりますか。お互いに心を閉じてしまいますね。特に深く傷つけられた時には、自分を守るために心を閉じてしまうと思います。傷があれば触ると痛くなります。だから、それに触らないように守るのです。

人間の係わりも同じ様な事が言えるのではないのでしょうか。心の傷があるからお互いに心を閉じて

しまうのです。しかし心を開かなかつたらその係わりはどうなりますか。心が堅くなってしまうたら係わりはなくなってしまうのです。でも心を開けば心の痛みをすごく感じるようになります。

傷は閉じてしまうと膿んでしまうものです。癒される為には、切る必要があります。切るとすごく痛いのです。でもその痛みが元気につながっているのです。癒される為、治る為、その痛みを引き受けなければならないのです。

心の傷に対しても同じ様な事が言えるのではないかと思います。

イエス様が私たちに赦しなさいとおっしゃった時、どのようにすれば赦すことができるかも教えてくださったと思います。先程読んだ福音の箇所には、「敵のために祈りなさい」というイエス様の言葉がありましたね。祈ると言うのは、神様に心を開くことです。心を閉ざしたとき、まず神様に心を開きなさい、という意味です。相手に対しては、傷が癒されない限り痛みを感じてしまい、なかなか心を開けないかもしれません。だからイエス様は、「まず神様に心を開きなさい。そうすることによって、その傷が癒されます。」とおっしゃっています。赦せない「気持ち」は、なかなか変わらないかもしれませんが、しかし、「赦す」というのは「気持ち」で赦すのではなく、「心を開く」ことで赦すのだと思います。痛みが残っている間は、赦せない気持ちは変わらないかもしれませんが、傷が癒されると気持ちが変わってきます。そのようにイエス様は、赦すために祈らなければならない(神様に心を開かなければならない)ことを教えてくださっているのです。だから、「主の祈り」の中では、いつも赦す心を表すようになっているのです。そして赦す心を願うことによって、私たちは、本当に神様の赦しをいただけるようになります。その赦しによって私たちの心の傷が癒され、私たちは新たに相手の人を愛することができるようになるのです。

こういうプロセスを通して、イエス様は赦しの大切さを教えてくださったのです。本当に赦しあう心がなければ、愛し合うことはできない、と。この恵みは、一番親しい関わりを持つ家族の中で、一番必要とされているのではないのでしょうか。私は、若い人たちに結婚の準備の話をするとき、いつもそういうことをわかってほしいと思っています。その時期の関わりの中では、適度な距離があり、分かち合うのが一番楽しい時です。しかし、結婚をすれば毎日の生活をともにすることになって、楽しいことだけではなく、いろいろ辛いこともあるでしょう。それだけではなく、深く関わるようになると、心の深いところまで入って行き、相手の心の傷に触れるようにもなります。相手のどういふところが痛いかわかるようになるから、相手を傷つけようと思えば、傷つけることもできます。そして深く関わるとどんなによい人でもお互いに傷つけあうことにもなります。そのように傷つけられたと思った時、「相手が自分を傷つけた」と、相手を責めてしまうようにもなります。しかし、傷つく時には、既に自分の心に傷があったのではないのでしょうか。もしかしたら相手がしたことは、自分の心の傷に触っただけかもしれません。深く考えずに人の心の傷に触ってしまうことは、よくあることです。また、自分が傷つけられたから仕返しをしようとして、相手の痛いところに触ってしまうこともよくあります。

人間は何らかの形で心に傷が残っているものです。心理学によれば、一番深い傷は、子どもの頃の傷です。子どもの心はまだ柔らかいので、少しでも触ると傷つきます。瀬戸物は固まる前に少しでもさわれば傷がついてしまいます。それと同じです。子どもは、自分ひとりでは生きて行けません。親や周りの人に頼って生きています。そして、子どもには理解できないことがたくさんあります。だから傷つきやすく、また子どもの時の傷が一番深い傷にもなります。人間は、いろいろな形で傷つけられるため、本人にも、どういう傷が心に残っているかはっきり分からない場合が多いです。しかし、その傷に触れるとすごく痛みます。痛いから傷つけられたと思うけれど、実際にはすでにそこに傷があったからこそ痛みを感じたのでしょう。

人間の関わりの中で、特に一番親しい関わりの中で、お互いによく考えないために傷つけてしまい、その傷に触ってしまうことがあります。だから人間の関わりは難しいです。大事ではあるけれど、いろいろな意味でお互いに傷つけあうこともよくあります。そのために、赦しあう心がなければ、愛し

合うこともできないのです。でもそういう時こそ、大事なチャンスなのです。心が癒されるチャンスが与えられているのです。ただし、それは癒しの恵みをいただくことができれば、です。その癒しの恵みをいただくために、イエス様がおっしゃっているのは、"祈ること(心を開くこと)"です。そして神様の恵みをいただくことによって、その傷が癒され、赦せない心も変わっていくのです。

そのように、神様の赦しが必要だからこそ、赦す心も必要なのです。

赦しの恵みは、教会の祈りの中で願いますね。ミサは、まず神様から赦しを願う祈りで始まります。それだけではなく、教会は、赦しの秘跡、告解を大切にしています。告解をすることによって私たちは神様の赦しをいただくのです。しかし、なぜ告解をしなければならないのでしょうか。私たちは、神様の赦しを願うつもりで告解をしますが、神様の赦しをいただくために告解をする必要はないのです。神様に自分の罪を知らせる必要はありません。

イエス様は、祈りに対して「祈る時、神様に自分には何が必要か、知らせる必要はない。あなたがたよりよく分かっているのだから。」とおっしゃいました。そして分かっているだけではなくて愛してくださるから、私たちが必要とするものをいつも与えてくださるのです。ですから、神様のために祈る必要はないのです。祈りは私たちにとって必要なのです。祈りは、心を開くことです。時々、「私のほうに目を向けてください。困っているのに見ていないのですか。なぜ助けてくれないのですか。」という気持ちで神様に願うことがあるかもしれません。しかし、神様は別のところを見ているわけではありません。いつも私たちの方をご覧になっています。別のところを見ているのは私たちの方です。困っている時だけ神様のほうに目を向けて「助けてください」と祈り、毎日与えられている恵みには気づいていないのかもしれませんが。

イエス様が祈りについて教えてくださったことは、告解に対しても、同じことが言えるのではないかと思います。神様は、"祈り"と同じように 罪 に対しても、既に私たちよりよくご存知なのです。神様の赦しをいただくために、自分の罪を告白する必要はありません。既にご存知だし、ある意味では願う必要もないのです。だから、謝るのは神様のためではありません。神様は、"謝ってほしい"と思っているのではなく "気づいてほしい" と思っているのです。謝って神様の心が変わるわけではありません。変えなければならないのは自分の心なのです。

教会の歴史をみると、告解は "神様に対して" ではなく、"共同体に対して" 罪の告白をする場でした。初代教会の頃、告解はみんなの前で行われていたのです。ただし、告解の対象となっていたのは、公の罪だけです。みんなが知っていること、たとえば信仰を捨てた人が教会に戻った時にみんなの前で自分の罪を認め、みんなの赦しを願う、というようなことでした。もっと後になって、共同体のメンバーが多くなると、このようなやり方が難しくなり、共同体全体ではなく、共同体の代表である司祭のところへ行って、罪を告白するようになりました。そして、せっかく個人的に罪を告白するのだから、公の罪だけではなくて、心を開くために自分しか知らない罪も告白するようになったのです。だから今でも、告解は、神様に対してではなく、共同体の代表である司祭に対して行うのです。根本的に、罪というのは神様と自分だけの関わりではなく、他の人との関わりの問題なのです。他の人に謝る、という気持ちで告解をしなければならないのです。だから赦しを願う心だけではなくて、赦す心でも行わなければなりません。そのために、共同体を代表する司祭に罪を告白するのです。でもそれは、神様が赦しを与えるために必要なものではありません。私たち共同体のために必要なものなのです。個人的に罪を告白した時、それは自分だけの問題ではありません。傷つけているのは、他の人との交わり、他の人との関わり、他の人の命なのです。それに対して神様の赦しをいただくために、お互いに赦しあわなければならないのです。そういう意味で、私たちには神様の赦しを願う必要があります。でも、教会で告解をすれば、それで終わり、というわけではありません。神様からの赦しの恵みは、毎日の生活の中で生かすために与えられているのです。決して自分だけのプレゼントではありません。みんなのために与えられている賜物です。だから、その赦しは毎日の生活の中で、家族の中で、また自分が働いている職場の中で、生かさなければならないのです。生かさなければ、神

様の赦しを与えられても私たちにとって何の役にも立たないことになります。だからイエス様は、「もしあなた方が他の人を赦さなければ、神様もあなた方を赦してくださらない。」と厳しい言葉でおっしゃったのです。これは神様の問題ではないのです。私たちの心の問題です。そういう大事な心を気づかせるためにイエス様が、教えてくださったのではないかと思います。イエス様が教えてくださった「主の祈り」の中には、神の子として生きるために、神様の赦しや自分自身の赦す心が必要であることが含まれています。それをいつも願うように、と教えてくださったのですね。

キリストの命、神様の命の豊かさを味わうため、体験するために、どれほど神様の赦しの恵みが必要なかを深く考え、赦しを願うだけではなくて、その赦しにいつも感謝するように勧めたいと思います。

最後に、イエス様が教えてくださった赦しに対しての心を願いながら、主の祈りを唱えましょう。

- 主の祈り -

ありがとうございました。